外国出身中学生への学習支援活動
－ 大学生ボランティアを中心とした試み －

藤本　久司・江成　幸

要旨：三重大学生が中心となり、南米やアジア地域など外国から来た中学生の学習をサポートするボランティア活動を行っている。活動に至った背景には、外国から来た子どもたちを取り巻く厳しい教育環境がある。活動開始後1年が過ぎ、ボランティアスタッフなどを対象にアンケートを行った。回答からは、異なる文化を持った子どもたちと向き合う中において、学習面だけではない様々な苦労と工夫、戸惑いと共感、認識と成長などを見てとることができる。見えてきた課題は多く、子どもたちの状況も刻々変化していくが、適宜、柔軟に対応し活動を継続発展させていくことが求められている。

1．はじめに

幼児期あるいは小中学校期、外国から日本に来た子どもたちが、中学生校での学習面で大きな壁にぶつかっている。日本語能力の不十分さや文化習慣の違いに加え、日本語習得まで教科の理解に空白が生じることによる学力不足、そして、周囲の理解不足、公的な支援システムの不備、情報の不足などにより、進学するにしても就職するにしても日本人生徒とは比較にならない程の困難に直面する。

そうした状況の中で、学力をつけたい、そして高校進学をしたいと努力している外国出身中学生のため、三重大学の大学生、教員、市民が協力しボランティアで教科学習をサポートする活動が始まった。本稿では、筆者２名（藤本、江成）がいずれも活動メンバーの一員であり、当事者としての立場から、本ボランティア活動立ち上げの経緯、１年間の活動の経過を紹介する。また、活動に参加したボランティアスタッフ、及び高校進学を果たした生徒３名の内２名のアンケートの記述内容を分析、紹介するとともに、今後の課題を考察する。それによって、自分たちの関わる活動を今後どのように方向づけていくか、活動当事者の具体的問題として、記録および分析を生かしていきたいと考えるものである。

本活動の重要なポリシーの１つに「学習支援の対象として現在関わっている中学生を対象にしない、また外部からの研究対象にさせない」ということがある。そのため、現在学習中の中学生は調査の対象にせず、ボランティアスタッフと高校進学を果たしたサポート経験者にアンケートをとった。無論、日常の活動の中で、支援内容の向上のため中学生に学習方法など意見・希望を聞く場面は自然に出てくる。だが、本稿のように公表を伴う研究報告においては「社会的ハンディを持つ未成年者であり、スタッフを信頼し参加しているサポート対象者を安易に研究対象者にすべきでない」という考えを大事にしていきたいと考える。我々当事者が率先してそのポリシーを守ることで、少なくともボランティア活動の範囲において、学習に支障が生じないよう彼らを守っていきたいと思う。

2．外国出身中学生の現状

三重県生活部国際室が2006年2月に発表した外国人登録者数調査によると、県内の在住外国人は2005年末において、47,551人となっている。「10年間で約2.3倍、平成元年（1989年）の4.5倍」（国際室調査資料）の数値であり、国籍別では、登録者数の43.4%を占めるブラジルを筆頭に、中国、フィリピン、ペルー、ボリビアの伸びが著しい。

また、三重県教育委員会2006年度調査（三重県国際交流財団まとめ）によると、「日本語指導が必要な外国人児童生徒数」は平成2006年9月時点で、小学校に810名（115校）、中学校に232人（45校）、計1,042名（160校）在籍する。これを1992年の対象者数と比べると、小学校で4.9倍、中学校で3.7倍の伸びである。もっともこれらの数値も基本的には各学校の判断においてカウントした児童生徒の集計であり、対象となるべき全ての児童生徒を網羅しているとは言えない。カウントされた数値以外に「会話などの日本語能力は優秀であるが学習の日本語能力が十分でない外国籍児童生徒」や「日本国籍を持っているが海外で生まれ日本語能力が十分でない児童生徒」などが相当数いると推測されるからである。

それでは、三重大学の位置する津市（合併後）内の「日本語指導が必要な外国人児童生徒」はどれくらいだろうか。現在、県教育委員会では数値を市町村別には公表していないが、2002年9月の三重県教育委員会資料では、現在の（新）津市に相当する区域において小学生計109名、中学生34名となっている。2002年9月三重県全体の対象者計は小学生459名、中学生201名であることを考慮すると、津市内でも、特に小学生で相当数増加していることが見込まれる。また、中学生数は一見大きく変化していないように見えるが、外国出身の中学生の在籍数は現実に増加しており、中学校で日本語能力に「問題がない」と判断されている者でも、完全ではない日本語能力が個々の学習能力に何らかの影響を及ぼしていることは、想像に難くない。したがって、中学生においても相当数の者が、実質的な「教科学力を身につけるにあたって日本語能力に問題のある児童生徒」といえよう。

3．高校進学の問題点

全国的に見て「高校への進学率は97%を超え」（三重県立高等学校入学者選抜制度検討委員会、2006）ていると言われる。しかしながら、幼児期、又は小中学校の途中で外国から日本に来て中学卒業を迎えた生徒がどの程度高校に進学しているかというと、いずれの自治体も正確な数値を示せているとはいいがたい。その主な原因は分母となる総生徒数の正確な把握が困難なことである。学校に通っている者だけでなく、就学年齢で学校に行っていない者、学校に籍があっても長く不登校の者、外国人学校に行っている者、中学校をやめてどこへいっているかわからない者など、日本人の生徒では把握されるはずのケースが、外国籍生徒の場合は不明確なままになり易い。いずれにしても、彼らの高校進学率は地域の状況によって大きく異なるが、どの地域においても日本人生徒よりはるかに低いことが推測できる。

また、インドシナ難民、中国帰国者の子弟が主流であった1990年代において梶田（1994）が既に指摘したように「幼稚園、小学校低学年への入学は比較的問題が少ないのに対して、中学校への中途からの入学は問題が多」く、「日本語の問題に加えて、（中略）進学問題が加わり、適応がより困難になる」という現実も起こっている。このとき梶田が予想したように、「日系

人や外国人の子弟の増大に伴って、教育システムへの適応にとどまらず、進学に関わる教育問題が本格化する」時代になった、といえる。

こうした状況の変化の中、外国籍生徒の増加した都府県においては、高校入試に関して様々な方策が考えられてきた。三重県の高校入試においては一般選抜、特色化選抜などと別に「海外帰国生徒・外国人生徒等に係る特別枠入学者選抜」が行われている。2007年度入試においては、「保護者とともに三重県内に居住しているか又は居住予定の外国籍を有する者で入国後6年以内の者」が、県内の17校22学科の中から希望する高校を選び受験することができ、小中学校の中途からの入学者に視点をおいた措置といえる[(1)]。試験は基本的に「自国語（または英語）又は日本語による作文と面接」である。外国籍生徒の状況が考慮された結果であるが、他の府県では高校に日本語教育を伴った外国籍だけのコースを設置するなど、先進的なケースも多い[(2)]。三重県でも、期間制限を超えた者への受験の際の「配慮」（問題文のルビ打ち、時間延長など）、特別枠の高校数や定員の拡大、高校進学後のサポート等、まだ様々な論点があり、検討が続いている。

なお、三重県内の現状では、進学希望者の大半は推薦入学制度、特色化選抜などによって、全日制や定時制高校などに合格を果たしている。また、滞在年数の長い外国出身者も年々増加しており、相当な日本語能力を持ち一般入試に合格し高校に進学する者も、少数ながら着実に増えている。

4．学習支援活動「ジョイア」の内容と経緯

1）活動の内容

それでは、大学生が主体になって開始された外国出身の中学生学習サポート「ジョイア」の内容と2006年7月までの経緯などについて述べたい。まず、活動の概要は以下のとおりである。

対象：小中学生の途中から日本へ来て、日本の高校への進学を希望している中学生
目的：日本語が不十分だったために習得できていない科目の学習をサポートする。
日時：毎週水曜日午後4時30分～6時30分の間の希望する時間
期間：5中旬～7月中旬、及び、9月末～3月中旬
場所：津市内＜詳細記載省略＞
連絡先：三重大学人文学部・藤本研究室、又は、同・江成研究室
　　若しくは、人文学部3年N＜氏名・電話番号・メールアドレス等記載省略＞
その他：サポート料は無料とする。
　　親の同意・理解があることを前提とする。
　　サポート時間中や往復時間中の行動は本人と親が責任を持つこと。

2）活動の経緯

活動の経緯は以下のとおりである。なお、こうした活動の契機ともなったのは、活動の開始より数ヶ月前、筆者（藤本）が別の調査を進める中で、津市の小中学校の外国籍の子どもを担当する巡回指導員2名（ブラジル人・日本人）から聞いた話である。それは、同市の外国籍生徒の高校進学率が（県内他市に比べて）非常に低い、進学したいと思っている中学生の勉強を

サポートしてくれるボランティアが近くにいれば未来を切り開ける子どもが必ず増える、という内容であった。その後、教員、学生有志と相談した結果、一緒に行動を起こすことになった。

2005年7月：教員（藤本）と学生4名が鈴鹿市内のブラジル人による子ども母語教室を見学。ブラジル人ボランティアとの話し合い。実情などを聞く。
その後、資料などで外国籍児童生徒の問題を学習。9月からのサポート活動開始を決定。

8月：活動を水曜日夕方に決定。場所を津市内公共施設で確保（予約）。

9月：大学生3名、教員1名、巡回指導員2名、ボリビア人中学生1名で活動内容、ルール等を相談。グループ名を「ジョイア」と命名。

10月：サポート活動開始（毎週水曜日午後4時半～6時半）。

2006年3月：高校受験日前で2006年度のサポート活動終了。
ジョイアを三重大学のサークルとして登録。学内で活動参加呼びかけのポスターを掲示。
「平成18年度三重大学国際交流基金国際交流事業経費助成対象事業」として、活動に必要な教材・消耗品・文具等購入のための助成金が認められた。

5月：2006年度前期のサポート活動開始、2つの新聞で活動が紹介された。
高校合格者のお祝い会（5月某日、学習時間後）。

7月：前期のサポート活動終了。

概要1（2005年10月から2006年3月まで）

活動回数（1回2時間）	22回
ボランティアスタッフ数	計13名（大学生・院生8名、大学教員3名、その他2名）
スタッフの1回当たり平均参加人数	5.6名
参加した中学生の実人数と国籍	計11名（ボリビア7名、ブラジル2名、ペルー1名、フィリピン1名）
中学生の1回当たり参加数	0（1回）～6名
参加者のうち中学3年生	4名
上記のうち県立高校の入試結果	合格3名、不合格1名

概要2（2006年5月から2006年7月まで）

活動回数（1回2時間）	11回
ボランティアスタッフ数	計15名（大学生・院生10名、大学教員3名、その他2名）
スタッフの1回当たり平均参加人数	6.4名
参加した中学生の実人数と国籍	計7名（ボリビア4名、ブラジル1名、コロンビア1名、フィリピン1名）
中学生の1回当たり参加数	0（1回）～4名
参加者のうち中学3年生	1名

サポートスタッフの顔ぶれは、2006年度に入り大学4年生が抜け新1,2年生が加わったことなどで大きく変わっている。また、学習サポートをするメンバー以外に、津市の巡回指導員2名がオブザーバーで協力し連携を取っており、当初から中学生たちとの仲介役を務め、仕事で関わった中学生にジョイアへの参加を勧めてくれた。最初こうした地道な呼びかけが主になり中学生が集まったが、途中から、中学生が同国出身の別の中学校生徒を誘って来たケースや、保護者がジョイアを紹介した新聞記事を見て子どもを参加させたケースも出てきた。

参加中学生の内、欠席せず連続して来る者は少なく、ある日は6名、ある日は1名という不確実さで、誰も来ない日も半期に1回ずつあった。また、学校のイベントなどがあり、途中から揃って来る日もあった。毎回最低5名参加して待機していたスタッフは、時には忙しく、時には時間をもてあますと言う状態だったが、慣れるにしたがって、中学生の少ないときは自分の勉強や作業をしたり、手の空いたメンバーでミーティングをしたりして時間を有効に使うことができるようになった。

なお、2005年度の3年生4名はいずれも定時制（昼間及び夜間）高校を受験し、3名が合格した。不合格の1名は、来日が2005年末であったため、まだ日本語が極めて不十分な状態での受験であった。なお、中学生のメンバーも2005年度と2006年度では大きく変わっていて、2006年度前期の8名の内、前年度から引き続いて参加している者は3名である。学校のクラブの関係で2006年度前期は参加できなかった者も多い。

また、経緯にあるように、2006年3月に三重大学内の助成金交付が決定し教科教材等の購入ができるようになった。それまでは生徒の持参する教科書、参考書、問題集、宿題などを使って教えるのが主であったため、この助成金は活動にとって大きなエネルギーになっている。

5．活動に関するアンケート分析

1）アンケートの概要

ジョイアが活動を始めてほぼ1年になるのを機に、活動を振り返り、よりよい方向性を探るためアンケートを実施した。2006年7月に、教員スタッフの藤本と江成が自由回答式の設問を用意し、ジョイアでの学習者のうち高校進学した2名と、学習サポートを担当したボランティアスタッフ13名から回答を得た。このうちスタッフの属性は、三重大学の学生・院生12名（ブラジルからの日系人留学生1名を含む）、その他1名で、男性が2名と女性が11名である。

活動では通常、中学生の出席者それぞれに、ボランティア1、2名がついて支援にあたっている。生徒の希望に合わせ、1回につき1科目に専念することもあれば、複数教科を補習することもある。教えた科目ごとのボランティアの延べ人数は、多い順に英語7名、数学7名、社会5名、国語4名、理科4名、日本語1名であった。

2）進学者の声

進学した生徒は、アンケートの設問にいずれも日本語で回答しており、ここでは本人による表記のまま紹介する。ジョイアのメンバーや活動についての感想は、「みんな明るい人ですごくよかったです」、「話がおもしろい」と答えている。ジョイアがスタートして半年間の短い参加だったが、なじみやすい雰囲気だったことがうかがえる。

「サポートを受けて良かったこと、うれしかったこと」への回答として、幅広い教科でサポー

トを受けた生徒は、点数が上がったことを挙げている。また、英語中心に学習した生徒は「英語の勉強をいろいろおしえてもらってすごくうれしかった」、「おしえ方がすごくよくて大学生のおかげで英語を（が）もっとわかるようになった」と学ぶ喜びをつづっている。後述するボランティアスタッフへのアンケートからは、生徒のこうした気持ちが、サポートする側にはっきりと伝わったことがわかる。

さらに、自分と同じように外国から来て進学を目指す人へアドバイスを求めたところ、「ちゃんと勉強すれば高校へ（に）とおれるからがんばって下さい」という励ましのほか、推薦を受けられるよう「中学校の勉強をちゃんとする。クラブをがんばる。遅刻と欠席をしない」という具体的な助言があった。

2人の生徒は、進学への意志をはっきりと持ち、着実に努力した点で共通している。後続の中学生にも体験談を伝えていくことが大切であろう。

3）学習者の姿勢

次に、ボランティアスタッフを対象としたアンケートの結果を分析していく。中学生支援で得た経験は、あるスタッフの「毎週、欠かさず来てくれる生徒がおり、ジョイアをとても気に入ってくれているようで嬉しかった」という感想に集約されるようだ。表5.1に示すとおり、勉強への姿勢が熱心で一生懸命であり、やる気や意欲があるなど、中学生たちへの印象はたいへん肯定的であり、向上心や積極性を高く評価している。生徒の態度は、明るい、元気、素直、純粋、まじめ、おとなしい、など表現に違いはあったが、良い印象で一致している。

サポートをして具体的に良かった点、うれしかった体験を表5. 2に挙げた。そこには、学習者の態度や学習の成果がボランティアのやる気にもつながった様子が見てとれる。

表5. 1　サポートした外国出身の中学生に関する感想（勉強内容以外で）

- 冬のとても寒い日でも、雨の日でも、ほとんど毎週来てくれる子がいて、勉強への意欲を感じた。
- 初めて来た日は緊張しているようだが、何度か来るうちに慣れてきて、楽しんで来てくれることがうれしい。
- 日本に来て大変なことなどあるかもしれないが、みんな明るくていい子だと思った。
- 前向きで向上心がある生徒がいて嬉しい。目を輝かせ、生き生きと興味のある話をしてくれる子どもたちが多いと思う。
- 自分の置かれている状況を把握していて、結構淡々としている印象を受ける。
- 日本人の平均よりもずっと熱心さ、積極性はある。
- 日本人の中学生とかわらない（若さ、幼さの点で）と感じたりする半面、日本人の学生よりも自分の国への関心（歴史、政治など）が高いと感じた。

表5. 2　サポートをして良かったこと、うれしかったことなど

- 「ああ！わかった！！」と言ってもらえた時はやりがいを感じてうれしかった。
- 熱心な生徒が待っていてくれると思うとうれしい。
- 子どもたちの方からも積極的に質問するなど、一生懸命取り組んでくれたこと。
- 中学生の笑顔を見たときや、「楽しかった」と言ってくれたとき。
- 中学生が覚えてうれしそうな顔をした時。
- みんなが一生懸命勉強しているのを見ていると自分もやる気が出てきた。
- 教えていた中学生が、高校入試に合格したこと。
- 毎回英語を教えていた子が、英語が一番好きだと言ってくれたこと。

4）教科の支援状況

ジョイアのボランティアは大学生が主軸であり、外国出身の子どもを初めて教える者がほとんどである。おおむね、中学生が補習を希望した内容を、各自の知識や教師アルバイトの経験などをもとに手助けする形をとっている。

サポートする上で難しかったことや、指導上の工夫を聞いたところ、学習者のニーズから今後の課題まで、参考となる意見が寄せられた。ここでは、学習面でスタッフが気づいた事柄を(a) 数学・理科、(b) 英語、(c) 国語・社会に分けてまとめてみよう。

(a)　数学・理科

数学と理科を合わせると、延べ 11 名のボランティアがサポートしたことがあると答えており、補習希望がいちばん多かった分野である。しかし、「ボランティアスタッフが文系に多く、数学や理科への対応が大変だった」ことも事実のようだ。スタッフ側の苦手意識のため教えるのが難しい、あるいは「自分の頭の中では分かっているのに、うまく言葉で伝えられない」といった苦労があった。サポートを希望する中学生が増えていけば、理数科目の得意なボランティアをさらに募ることが必要だろう。

学習内容に関しては、「計算が苦手な子が多く、そのため、数学が苦手になることが多い」、「正・負の計算など説明しにくい問題を教えるのに苦労した。3-5=-2 などの正負の計算が苦手な人が多かった」と指摘されている。

今後に向けて、「レベルをみるために、基本的な計算問題を与え、日本語力を考えて図形や関数、文章問題に取り組んだほうがいい」という意見もあった。この提案をしたスタッフは、「塾ではないから、どの程度徹底されるのかがむずかしい」とつけ加えているが、希望者の受け入れ体制づくりや、支援のシステム化はジョイア全体の検討課題であろう。

(b)　英語

英語は、延べ 7 名のボランティアが指導にあたり、1 つの教科としては数学と並んで補習希望が多かった。ジョイアには、南米のスペイン語圏からの中学生が多い。そのため、「外国語（英語）を外国語（日本語）で教えられるのは彼らにとって、とても理解するのが難しい」と気づいたスタッフもいる。

例えば、「書き言葉が完璧でないため、和訳、英訳がうまくできない」ことがある。この対応策として、「日本の英語学習は訳することが重要だから、単語をおぼえていくのと同時に、日本語も覚えさせるといい」という意見があった。

また、「英語のスペルをそのままアルファベットどおりに発音してしまう生徒が多く、なかなかそうでないことの説明が難しかった」との指摘もある。母語のスペイン語が、いわゆるローマ字読みに近いためと考えられる。このようなケースでは、「英語は、なるべく口で発音させるようにした点がよかった」という教え方が参考になりそうだ。

(c)　国語・社会

国語と社会は、全般にわたり日本語での読み書き、思考、暗記が成績評価に影響しやすい。それだけに、日本語の能力が鍵となる科目である。延べ 9 名がサポートを提供した。

国語の補習では、「文法をどう教えたらいいのかよくわからなくて、大変だった」、「日本語

が十分でなく、漢字も難しいようなので、国語を教えた時は理解するのに時間がかかって大変だった」など苦労がうかがえる。

社会のみを取りあげた記述はなかったが、あるスタッフは「数学、社会、理科の用語を覚えることはかなりの負担だと感じた。日常生活で使う頻度がないに等しいため」と指摘している。覚えるべき事柄がすべて日本語で説明される点で「学習思考言語」（太田,2000,173）のハードルが垣間みられ、サポートも急務と思われる。

5）指導の留意点と工夫

各自の経験にもとづくアンケート結果を総合すると、共通の苦労や指導のヒントがあった。そこで、(a) 日本語にかかわること、および (b) 教え方に関し、スタッフがどんな問題に気づき、どんな工夫をしたのか検討してみたい。

(a)　日本語にかかわる課題

ジョイアは、原則として日本語でサポートを行っている。したがって、ジョイアで教科中心に学習しようとすれば、日常的な「社会生活言語」（太田,2000,173）の日本語をある程度は前提にせざるをえない。

参加した中学生について、アンケートでは「日本語をとても流暢に話せる生徒が多く、驚いた」という回答がある一方で、「日本語が上手に伝わる子どもと伝わらない子どもがいて、伝わる子どもにはなんとかなったが、伝わらない子どもにはどうして良いか、分からなかった」という記述も見られた。

学習者がすでに「社会生活言語」を使いこなすケースでも、先に論じた教科別の問題点を含め、日本語を介したサポートの思わぬ難しさにスタッフが苦心することもあった。例えば,「日本語の意味や、文法を聞かれることがあり、うまく説明できなかった」経験や、「日常会話では使わない専門用語（和、差、仮定法など）は難しく、簡単な言葉に言い換えないと伝わらない」のだが、「やさしい日本語に言い換えるのが難しい」という実感は、多くのスタッフに共通している。こうした困難に向き合いながら、表 5.3 のようなスタッフ個々の工夫も見られる。

表 5. 3　日本語補助の工夫

・日本人の中学生なら自然に理解できる用語ができていない（漢字から推測できない）ので、用語の説明に時間をかけた。 ・大きな字で実際書くと同時に発音していく過程の中で、日本語に親しんでくれるようになった。 ・漢字の読み方を教えてあげたり、難しい語を分かりやすい言葉に置き換えてあげることで、教科書の内容理解の手助けをすることができた。

教科サポートに取り組むジョイアでも、日本語教育との連携は不可欠と考えられる。今後は徐々に、日本語教材の併用や、国語辞典および外国語の和訳辞書の活用などを試みる予定である。

(b)　教え方の工夫

ボランティアスタッフに今後の抱負を聞いたところ、「もっと上手に教えられるようになりたい」、「勉強が楽しいと思ってくれる雰囲気をつくりたい」など、ボランティアとして成長し

ていこうとする意識が感じとれる。そのためには、ジョイアのメンバー相互が経験を共有し、蓄積することは、その一助となろう。そこでアンケートの回答から、教科をこえて参考となる指導方法を紹介する（表 5. 4)。

表 5. 4　効果的だった指導方法

・事前に何が難しく、もっと練習したいか聞くことで、必要なところを手伝うことができる。 ・どの教科でも、日常のことに置き換えて説明するとわかりやすい。 ・言葉が通じない分は画を描けば通じることが分かった。その辺りは日本人も同じだと思う。 ・図とか、例文とか、何か紙にかいて示しながら教えたほうがわかりやすい。 ・「分かった？」と聞くのではなく、「～は何？」など、具体的な質問をしたほうがいい。 ・プリントなどの問題を、教科書を確認しながら、なるべく彼らが自分で解くようにした。

活動ではもちろん試行錯誤があり、「何を教えていいのか、分からない時があった」、「自分に教える力が足りないときにもどかしいし、不安だった」、「集中してくれなくて、勉強への導入が難しく思ったことがあった」といった率直な声も寄せられた。

しかし発足から間もないとはいえ、「ジョイアでは何か新しいことをはじめる時は、制度、人、現状の把握と自分のスキルや周りの協力、サポートが必要であることを経験した」という意見があったことを力強く受けとめたい。経験をお互いに学び生かすことは、ジョイアという新しいボランティア組織における支柱づくりにつながるだろう。

6）異文化交流の成果

ジョイアは学習サポートを目的としているが、前述の「5.2）進学者の声」で触れたように、学習者とのコミュニケーションが円滑に進む場面が多く見られた。おそらく、大学生ボランティアが中心となっており、中学生とは比較的年齢が近いためだろう。うちとけた雰囲気で外国出身の学習者と接するうちに、異文化交流としての成果もまた生まれている。

アンケートを締めくくる質問として、ジョイアでの経験をふまえて考えたことや、今後したいことを聞いたところ、異文化やボランティア活動への関心が高いことがわかった。筆者らの予想を越えて、来日外国人の背景を理解したいと述べた者が多く、実践をきっかけに、ボランティアスタッフ自身が主体的に学ぶぼうとする姿勢が特筆される（表 5. 5, 5. 6)。

表 5. 5　来日外国人の背景や異文化への関心

・中学生の出身国について興味がわいた。スペイン語を勉強してみたくなった。 ・移民について勉強したいと思った。 ・日系人や移民に関しての知識を深めたい。 ・人対人、個人対個人が対等であるという考えを持ち、まわりの人たちにも理解してもらえるような社会になればと思う。 ・中学生以外にも、もっと地域の外国人と関わりたい。 ・言葉の壁を恐れないで積極的に質問したりコミュニケーションを取ることが、自分にとっても相手にとってもプラスになると思う。まずは英会話をできるように英語に接していきたい。 ・教育を与えなければいけない機関が、その柔軟さが欠けた結果として、一部の子どもたちの教育を受ける権利を奪ってしまい、なおかつその後の職業選択の権利などを奪ってしまう可能性があることを考えていきたい。

表5．6　外国人支援ボランティアへの関心

・子どもたちが何か悩んでいることがあったら、話を聞いてあげたい。 ・日本に移住してきた人たちは生活の中にもたくさんの苦労があると思うので、サポートできたらいい。 ・日本語ボランティアに興味を持った。 ・日本語が使えない、漢字が読めないという中で授業についていくのはとても大変なことだと思う。その手助けがジョイアを通じて少しでもできたら嬉しい。日本の中で暮らす外国人がどのような事に一番困っているのかなどの問題点を知り、その手助けができたらいい。 ・留学生のチューターをしたい。

ジョイアの教員スタッフは、学生スタッフに対し、日本在住の外国人に関する情報や資料を提供し、解説やディスカッションの機会をもつよう心がけている。大学を拠点とした学習支援グループである特徴を生かして、地域に暮らす外国人に関する参加メンバーの理解を助け、知的ニーズに応えていきたい。

6．おわりに ― 新たな方向性と可能性 ―

これまで見てきたような経緯の中でジョイアの学習サポート活動は継続している。大学生が主体となっているため、就職活動や卒業を期に活動を離れる者もいるが、それと同じくらいの人数が新たに参加している。こうした熱意を無にすることなく、変化する子どもたちや周囲の状況に応じて、活動内容を常に吟味していかなければならない。

おわりに当たって、今後のジョイアの活動の方向性や地域との関わりにおける新たな可能性等について述べておきたい。

第一は、活動内容、特にコンセプトの柔軟性の構築である。発足当初、「ジョイア」を活動時間のみのボランティアグループとして位置づけたため、いわゆるサークル的な交流や学習サポート以外の活動は極めて限定してきた。このことはストイックな信念の表明としては有効であったが、反面、柔軟性を欠き、ともすれば若いスタッフのモチベーションを収縮させるおそれをはらんでいる。持続可能なボランティアグループとして、かつモチベーションを維持するため、スタッフにとって気のおけない一体感や楽しさを加えた柔軟な活動をどう作っていくか、今後の大事な課題である。

第二は、第一の課題と関連するが、学習者である子どもたち、及びその家族との関わりを活動に組み入れていく必要性である。活動日に出会い、単に、教え教えられる関係だけでなく、有意義な交流イベントに一緒に参加するなど、好ましい形で彼らの家族や背景を知ることは、大学生のような立場の若者にとって、外国人の問題を日本社会の問題として捉える良い機会でもある。そうした知的欲求が大きいことはアンケートからもうかがえ、それに応えられる活動を探っていきたい。このことは同時に、学習者である子どもたちにとっても、ジョイアを今まで以上に通いやすい、親しみの持てる場にしていくだろう。また、関わりを広げる一方で、お互いのプライバシーを侵害しないよう適切なルールを作ることも必要であろう。

第三は、行政、とりわけ津市教育委員会との連携である。対象の子どもたちは2、3か所の中学校に集まっているのではなく、市内のあらゆる学校に分散している。むしろ外国から来た仲間が少ない状況にいる子どもが、よりサポートを必要としている。しかし、すべての呼びかけや情報伝達をスタッフや協力者の巡回指導員で行うことには限界があり、教育現場にもジョイアを理解している教員が多くいるわけではない。学校への伝達が可能な市の教育委員会との

協力が一層必要である。一方で、連絡をすべて行政に任せるのではなく、スタッフが各学校に出向いて情報を伝え中学校教員の理解を深めたり、県、市、各国際交流協会等のイベントを活用し子どもやその親に活動情報を伝えるなど、広報にも務めていきたい。

第四は、日本語のレベルに大きな問題のある子どもへの対応、特に、教科学習と日本語教育の関係である。日本語の十分でない子どもに対応したときの戸惑いと、何とか伝えたいゆえの歯がゆさはアンケートにも表れている。塾講師や家庭教師のアルバイトなどで教科を教えることに比較的慣れている大学生も、解答の説明の場面などで、日本人中学生なら学力と関係なく知っているはずの日本語を、目の前の中学生が知らないことを知り困惑する。大学生側には日本語教育の専門知識を持つ者は少なく、改めてその分野の必要性も認識された。市教育委員会担当者によると、こうした子どもは実際に多いとのことであり、その子どもたちへの対応、必要な基本的ノウハウをどこまでスタッフが身につけ対象を広げていくか、重要かつ緊急な課題である。

第五は、中学生以外の子どもへのサポートの可能性である。ジョイアは基本的に、外国から来て高校進学を目指す中学生の学習を支援するグループとして歩み始めた。しかし、授業を理解したい、将来高校を目指したい、という小学生からの潜在的需要はかなり大きいことが推測され、徒歩や自転車で往復可能な近隣在住の小学校高学年生などに対象を広げようという案もある。この問題はスタッフの人数に依拠する要素も強く、そうしたことも含め、状況を見極めつつ徐々に対応していくことになると思われる。

第六は、他地域や県外の同じような支援団体との情報交換、連携である。三重県内で中学生を対象に学習サポートをしている団体は鈴鹿市、伊賀市その他で見られるが決して多くない。近い将来、それらの団体との情報交換はもちろん必要であり、さらに県外の団体との交流なども実現し、相互に情報・アイデアの交換をすることにより、活動内容の向上に生かしていこうと考えている。

第七として最後に、大学外スタッフの増加の可能性をあげておきたい。2006年度現在、ジョイアのサポートスタッフのうち2名は一般の市民、団体職員である。また、巡回指導員の2名が協力者として、仕事を通じ子どもたちや中学校教員との連絡役となり、随時ミーティングにも参加している。こうした社会人と大学生が共にボランティア活動を行っている意味は非常に大きい。今後社会に出る大学生にとってこうした活動形態は、大学の授業だけでは得がたい経験であろう。このような一般市民、社会人のスタッフを広げていくことも、今後の活動の展開と相まって、内容の充実につながる重要な課題と思われる。

以上の課題はいずれも早期に方向を決め、行動に移していきたい。外国人の状況、そしてその子どもの状況は1年ごとに大きく変化している。そして子ども1人1人の10代のひとときは二度と取り返すことのできない貴重な時間であり、決して先送りが許される種類のものではない。刻々と変わる環境を見極め、大学生ボランティアを中心とした学習サポート活動を柔軟かつ適切に前進させていかなければならない。

（1～4節、6節担当：藤本久司、5節担当：江成幸）

注

(1) 三重県の高校入試においては、「海外帰国生徒・外国人生徒等に係る特別枠入学者選抜」が取り入れられている。対象者は2006年度入試まで「入国後3年以内の者」であったが、2007年度入試から「入国後6年以内の者」となった。志願先は2005年度入試までは6校6学科であったが、少なくとも5校は英語を中心とした学科であり、実質的に「新渡日外国人の真剣に学びたいと思っている子どもたちに対して門戸を閉ざし」（三重県人権問題研究所、2002）ている、という批判があった。2006年度入試から対象が17校22学科に改められた。各高校とも募集人員は海外帰国生徒・外国人生徒等を合わせて5人以内である。試験科目は記述のように作文と面接であるが、学校長の判断により簡単な基礎学力検査を課すことができる。また、2007年度入試から、この特別枠を準用し、「夜間定時制課程における外国人生徒等の選抜」が実施可能となった。

(2) 例えば、大阪府の高校入試においては府立高校5校において「中国帰国生徒及び外国人生徒入学者選抜」がある。小学校4年生以上の学年で来日した生徒が対象であり、試験は数学、英語、作文とし、問題はルビ付きで、作文は母語でも良い。英語以外の辞書の持込可とし、受験時間を通常の1.3倍と定めるなど「配慮」がなされている（平成19年度大阪府公立高等学校入学者選抜実施要項）。また、高校入学後も2年生までの日本語能力試験1級合格を目標に日本語授業が特別に組まれている。

参考文献

太田晴雄『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院　2000

梶田孝道『外国人労働者と日本』日本放送出版協会　1994

三重県人権問題研究所『研究所通信』No.20　2002

三重県立高等学校入学者選抜制度検討委員会『三重県立高等学校入学者選抜の在り方について（協議のまとめ）』三重県教育委員会　2006

平成19年度大阪府公立高等学校入学者選抜実施要項　第4　中国帰国生徒及び外国人生徒入学者選抜 PDF ファイル
http://www. pref. osaka. jp/kyoishinko/kotogakko/gakuji-g/H19_yoko/HS05. pdf